

Thames Pathに設置されているベンチ

著者	石川 郁二
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	26
ページ	231-271
発行年	2010-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/6468

法政大学「多摩論集」第26号
2010年3月

Thames Pathに設置されているベンチ

石 川 郁 二

Thames Pathに設置されているベンチ

石 川 郁 二

1. はじめに

イギリス人は、何もやることがない時に「Walkingに行こう」と言う人が多い。それだけWalkingがイギリス人の生活の中に入り込んでいるのである。Walkingはイギリスの文化の一つ、と言えるかもしれない。

Thames Pathを歩いている時、午後2時か3時頃に、近隣の人たちが1人2人とThames Pathに集まってくるという光景に、何回も出くわしたものである。多くの人たちは高齢者であった。気候が良い時節だと、日課にしているように、集まった人たちが挨拶を交わし、社交の場となっている。

Thames Pathにはベンチがよく置いてある。疲れた人々が休むために、話をするために、景色を見るために、ちょっと休憩を取ってスナックでも食べるためになど、利用する理由はさまざまではあるが、ベンチを活用している人が結構多い。ベンチは少し疲れた人には有り難い存在である。

ベンチを利用する人たちは近隣に住んでいる人たち、ピクニックに来ている人たち、ゆっくり歩いてWalkingを楽しんでいる人たちである。Thames Pathの全行程を短時間で歩き通そう、と思っている人たちはベンチをほとんど利用していない。

Thames Pathに設置されているベンチは本当に種類が多い。ベンチの素材が違い、形も違う。塗られているペンキの色も違い、ベンチの設置者も違う。ベンチの種類は実にさまざまである。ベンチの置かれている数や置かれている状況も、Thames Pathの場所によって違っている。

このベンチの種類や数の違いなどから、あることが分かってきた。ベンチの違いを分析していくと、それがそのままThames Pathを大きく3分割することになる、と言えるのである。

2. Thames Pathの全行程にあるベンチ概観

Thames Pathに置かれているベンチは、素材的にもデザインのにもいろいろなベンチがある。

すべて木製のもの、すべてコンクリート製のもの、すべて鉄製のものや鋳物製のもの、そして、それらの素材が一緒に使われて一つのベンチを形作っているものもある。

ベンチの脚のところは鋳物製で腰を掛けるところが木製のベンチが、数としては一番多い。しかし、同じ素材を使っているとはいえ、脚の形や背もたれの形はさまざまであり、肘置きなどの形などはそれぞれ微妙に異なっている。

すべて金属でできているベンチがある。金属は鉄が多い。幅の狭い帯状の鉄が、脚だけではなく、腰掛けの部分や背もたれの部分をも形作っている。コンクリートと石でできているベンチはどっしりと置かれ、風が吹いてもびくともしないと思われる。鉄製や石製のベンチは、長く腰掛けていると、体の熱がすべて奪われてしまうのではないかとと思われるベンチである。

すべて木でできているベンチでも、腰掛けの部分が幅の広い一枚板でできているものもあれば、幅の狭い板が数枚使用されているものもある。腰を掛ける部分から背もたれの部分まで、さらにその先まで幅の狭い板が付いており、首を乗せて空を見ることができるような構造のベンチもある。

一番単純な構造のものは、単に丸太を短く切って、縦に置いてあるだけのものである。これはベンチとは言い難いものだが、疲れた時に腰を下ろして休むには、この椅子で充分である。

最近の若者に受けるような、斬新なデザインのベンチもある。歩いている人が座ってみたい気持ちに駆られるベンチもある。

数脚同じようなベンチが設置されてはいても、色はさまざまであり、腰掛けと背もたれの形は同じだが脚の形が少し違っているというように、異なっている箇所があるのは、見ていて飽きさせない配慮である。

それらのいろいろなベンチに共通するものは、動かないように地面に固定されていることである。強風のいたずらや、子供や大人の都合で動かしたり、酔った人が移動させたりできないようになっている。ベンチの脚が土に埋められ

Thames Pathに設置されているベンチ

ている場合もあるが、ほとんどのベンチは、ベンチの下の地面が四角くコンクリートで固められており、そのコンクリートにベンチの脚が埋め込まれているか、金具でしっかりと固定されているのである。

もう一つは、企業の派手な広告がない、ということである。全行程の中で一箇所だけ企業名の載っているベンチがあった。Readingにあるベンチで、大きな草地の広場の端を通っているThames Pathに、数脚のベンチが置かれていた。近くにある企業の名前が書かれているプレートが、ベンチの背もたれに付けられている。プレートには有名な詩人の詩が数行書かれており、一番下の横に企業名が書かれている。Thames Pathを歩き通して、広告用として商品名など書かれているベンチは1脚も目にしなかった。

ベンチの設置者としては、公の行政やThames Pathを管理している団体などがある。ベンチを見ていて一番目に付いたのは、個人からの寄贈である。Thames Pathを愛した夫が亡くなり、故人を偲び、懐かしい思い出として妻や家族が寄贈しているベンチが多いのである。

Thames Pathにベンチが設置されている数と地域の関係について言えば、やはり人が多いところにはベンチの数も多く設置されている。つまり、ロンドン市内のThames Pathにはベンチがかなり多く置かれている。少し歩くとすぐにベンチを見つけ出すことができる。それだけ利用者が多いということであるが、これはロンドンという特殊事情にもよるものである。テムズ川の近くに住んでいたり、職場があったりしてThames Pathを利用している人たちだけではなく、世界中からの多くの観光客が利用しているのである。

ロンドンの郊外に行くと、ロンドン市内のように次から次へとベンチが設置されているわけではない。ベンチはある程度の間隔を置いて設置されている。とは言っても、Thames Path沿いにある公園には、ベンチがまとまって置いてあるところが多い。牧草地には、1、2脚置いてあるところもあれば、ぜんぜん設置されていない区間もある。

Oxfordから先の田園地帯に行くと、あまりベンチは見られない。村に近くなったり、村の中をThames Pathが通っていたりする区間には、ベンチが置かれているところがあるが、大きな畑の脇を通っているThames Pathにはベンチは置かれていない。これは畑を耕したり収穫したりするときに、大きな機械を使用し

ているために、ベンチがあると畑仕事に差し支えるからであろう。

畑の端を通っているThames Pathを歩く時には、畑の所有者の邪魔にならないように、作業の邪魔をしないように、Thames Pathを通らせてもらう、という気持ちを持つことが大切である。その区間に入っても、通行するだけで、なるべく早くその区間から出ていくべきなのである。だからベンチのような座るものがそこにはないのである。

全行程約290km（180miles）あるThames Pathに設置されているベンチを、ロンドンのThames Flood Barrierから、テムズ川の源であるThames Headまで、検討していきたい。撮ってきた写真のすべてを掲載するわけにはいかないので、割愛したものも多くあるが、種類の違うベンチは、なるべく載せるようにしてある¹⁾。

Thames Pathに設置されているベンチを検討していくと、Thames Path自体を大きく3つの区間に分けることができる、ということが分かってくる。それは次の3区間である。

1. Thames Flood BarrierからHampton Courtまでの都市部の区間
2. Hampton CourtからOxfordまでの郊外の区間
3. OxfordからThames Headまでの田園の区間

この3つの分割は、交通手段や道自体の違いでも分けられるものである。拙論では、この3つの区間をそれぞれ、都市型Thames Path、郊外型Thames Path、そして田園型Thames Pathという名前を付けた²⁾。

この小論では、その3つのそれぞれの区間を、近くの駅名や地名、または施設名などでさらに細かい区間に分けることにする。駅名を使っているところは、Thames Pathのすぐ近くに駅があり、歩いて数分でThames Pathに接続できるところにある駅である。ただし、駅からThames Pathへ接続している道路に置いてあるベンチには言及していない。

Thames Pathをロンドンからテムズ川の源まで遡り、設置されているベンチを検討していくことにする。

3. Thames Flood BarrierからHampton Courtまでに設置されているベンチ

この区間はロンドンという大都市の中を通っているThames Pathである。単にThames Pathを歩いて楽しむ、という人たちだけではなく、ロンドン観光をする人たちや、テムズ沿いにある劇場などに来る人たち、職場から出て昼の休憩のために利用している人たちもいる。つまり、Thames Pathを利用している目的が、「Thames Pathを歩く」ということと異なる利用をしている人たちが多くいるのであり、むしろそのような人たちのほうが人数的には多いと言える。

この区間のベンチは、同じものが続いて数脚設置されているところは何ヶ所もある。全く同じものが設置されている場合と、似てはいるが一部が違っているベンチの場合もある。

ベンチの形も斬新なものがある。金属製のベンチが多く見られ、ロンドン名物のシャワーが何回降ってきても、朽ちない素材を使っているようである。

側面の鋳物はデザインが凝っているものが多い。ロンドンの威厳を表現しているかのように、単純なデザインではないのである。

単に木製の簡単な構造のものは数が少ない。

Richmondあたりから上流では、テムズ川沿いが細長い草地になっている場所がある。そのようなところではベンチが無くとも、人々はその草地で休むことができる。ロンドンの中心地を離れるに従って、ベンチの数も減ってくるのである。

Thames Flood Barrier辺りは人が少ないが、観光する施設のある区域は人が多く、ベンチの置き方は何脚も近場に設置されている。やはり、人の数が大きく影響しているのである。

1) Thames Flood Barrier～North Greenwich Station

この区間のThames Pathは、テムズ川の上流に向かって左側に設置されている。

Thames Flood Barrierの出発地点にあるベンチは、簡単な作りのベンチである。両側の脚に少し太めの板が使われており、その上に板が載せてあるだけで、背もたれも肘置きもないベンチである。写真では左下に2脚写っている（写真ベンチ1）。



写真1



写真2



写真3



写真4

脚と両端の肘置きは鉄の丸いパイプが使われており、座るところと背もたれは木製の板が9枚使用されているベンチがある。木製の板の後ろには鉄の板状のものが付いており、木製の板がリベットで留められている。鉄のパイプは、脚の部分は直線で、肘置きの部分は曲線を描いている。板にペンキの色はもうなく、腰掛けと背もたれが木製の板ということがはっきり分かる。地面は石とコンクリートで固められており、ベンチのパイプの脚が煉瓦型のものに埋め込まれている（写真ベンチ2）。

金属と板を組み合わせて作られているベンチだが、脚とそれに付いている板状の金属、さらにその平たい金属に付いている18枚の木製の板が、「写真ベンチ2」のベンチとは違っている。腰掛け用と背もたれ用の板は、ドミノ倒しのように感じられる置き方をされている。金属の脚は両方に1本ずつで、丸い形をしている（写真ベンチ3）。

金属の脚と肘置きがあり、木製の板を腰掛け用と背もたれ用に使っているベンチがある。肘置きには板状の金属を使っている。金属の部分は黄色のペンキが塗

Thames Pathに設置されているベンチ



写真5



写真6



写真7



写真8

られている。同じベンチが3脚、並べて設置されている。遠くにもやはり同じベンチが3脚置かれているのが分かる。右の柵の中にも同じベンチがあるが、こちらのベンチはThames Path上のベンチとは言えない（写真ベンチ4）。

2) North Greenwich Station～Tower Bridge

15分位歩いたところにあるベンチ。「写真ベンチ2」と同じような構造で、座るところと背もたれのところは板が何枚も置いてあり、肘置きと脚は、鉄製のパイプでつくられている。肘置きの形は丸く円を描いている。「写真ベンチ2」とは肘置きのところのパイプの曲線が違う（写真ベンチ5）。

すべて金属でできているベンチだが、いろいろなデザインのものが3種類ある。ステンレスのような素材でできているベンチ（写真ベンチ6）、少し濃い青色の鉄製のベンチで4段の石段の上に設置されているベンチ（写真ベンチ7）、青緑色の鉄製のベンチだが、デザインが違い、腰掛け用と背もたれ用に、帯状の鉄板が縦に29本使用されているベンチもある（写真ベンチ8）。



写真9



写真10



写真11



写真12

柵を背もたれ代わりにうまく利用しているベンチがある。四角いスチール製の脚と横棒があり、その横棒に板が腰掛け用に何枚か載せてある。これとほとんど同じベンチが「写真ベンチ9」のベンチである。違いは、柵がカーブしており、そのカーブに合わせてベンチも湾曲しているところだけである。

テムズ川の堤防に設置してある鋳物製の柵の手前に、四角いスチール製の脚と横棒、そして腰掛け用に板が何枚か載せてあるベンチがある。この辺りには、同じベンチが十数脚、並べて置いてある（写真ベンチ9）。

GreenwichにあるRoyal Naval Collegeとテムズ川に挟まれたThames Pathに設置されているベンチで、鋳物の脚に板が3枚付いている。腰を掛けるところに2枚、背もたれに1枚の板がある。ベンチの脚は下の石板にボルトで固定されている。写真には同じベンチが5脚見える（写真ベンチ10）。

GreenwichのFoot Tunnelを渡って、対岸にあるベンチは、「写真ベンチ8」のベンチと同じ形でやはり金属製だが、塗られている色が違う。

長い4枚の板が4つの鋳物製の脚に固定されているベンチがある。背もたれも



写真13



写真14



写真15



写真16

肘置きもない構造だが、普通のベンチとは大きく違う。10名はゆっくり座ることができるだろう（写真ベンチ11）。

複数座れるベンチではないので、ベンチとは言えないものがある。椅子と言うべきだろうが、車道とThames Pathの間に置かれているので、車道と歩道を分ける役割もしているものである。疲れた時には腰を下ろして休むことができるので、便利である。黒色の鋳物製で、腰を掛けるところは色が違う。丸い腰掛けと腰掛けの間に、腰掛けよりも高いものが置いてある。これはゴミ入れである。ゴミを捨てるものがそばにあるということは、やはり腰を掛ける目的で設置されていると考えてよいだろう（写真ベンチ12）。

すべて金属製のベンチだが、いろいろな斬新なデザインのベンチがある。写真を4枚載せておく。「写真ベンチ13」は他の場所でも見られるベンチである。「写真ベンチ14」はデザインがおもしろく、素材が一見プラスチックではないかと間違えてしまう。「写真ベンチ15」は椅子型のものを3つ、両側の湾曲したパイプに渡したボールに付けてあり、ベンチと椅子を合わせた形である。「写真ベ

ンチ16」は、「写真ベンチ15」とほとんど同じ構造であるが、側面の湾曲したパイプを固定している丸いコンクリート製の支柱に、金属製の箱が置かれていないため、受ける印象が違っている。

湾曲したテムズ川を一望できるところに、すべて木製のベンチが置いてある。ロンドンの中といっても、金属製のベンチばかりではないのである。

鉄製のパイプに付いている帯状の鉄の板に、何枚もの木製の板を取り付けたベンチがある。板はもう古くなっているから、設置されてかなり年数が経っているようだ。ここには、これと同じベンチが何脚も置いてある（写真ベンチ17）。

3) Tower Bridge～Westminster～Chelsea

Hungerford BridgeからLondon Eyeにかけては、同じベンチが2脚ずつ間隔を少しおいて設置してある。脚は鉄製の四角い棒が3本あり、石畳状のコンクリートに差し込まれ固定されている。その鉄製の棒の脚に付いている帯状の金属板が、腰掛けのところから傾斜して上に延び、そこに背もたれ用の幅の狭い板が8枚付けられている（写真ベンチ18）。

Westminster Bridgeから上流にかけても、同じ型のベンチが数脚設置されている。国会議事堂の対岸のThames Pathである。これらのベンチは石製の台座の上に固定されており、ロンドン観光の人たちが休息できるようになっている。お昼時には、このベンチに座って昼食を取っている観光客をよく見かけた。脚と肘置きは鋳物製で、白鳥のデザインになっている。腰掛けと背もたれ用に13



写真17



写真18



写真19



写真20

枚の板が付いている。写真には見えていないが、背もたれの一番上の板の先に、つまり裏側に、板が1枚付いている（写真ベンチ19）。

テムズ川とマンションとの間にある煉瓦敷きのThames Pathに設置されているベンチは、少し長いベンチで、腰掛けは板なのだが、そこに鉄製の丸いパイプの肘置きが4本付いており、1人の座るスペースがきちんと確保されているベンチである。

4) Chelsea～Hammersmith

Chelseaの対岸にあるBattersea Parkには、側面の脚と肘置きが鋳物製のベンチがあちこちに置かれている。腰を掛けるところと背もたれのところは木製の幅の狭い板が何枚か付けられており、赤色に塗られている。

そのBattersea Parkの横を流れているテムズ川の堤防の一部に、腰を掛けることができるようにベンチの形をしたコンクリートの堤防がある（写真ベンチ20）。このようなベンチは、歩く道にベンチを別に置いてあるわけではないので、スペースの観点から言えば、堤防の有効利用と言えるのではないか。

Albert Bridgeから、テムズ川を上流に向かって右側のThames Pathを歩くと、側面が鋳物でできており、それにギリシャ神話に出てきそうな、顔は人間で胴体は馬、羽がついているデザインをしたベンチが設置されている。ベンチは長めで、模様の付いた鋳物はベンチの真ん中にも置いてあり、肘置きになるとともに、座る場所が限定されるようになっている。ベンチの座るところと背もたれは幅の狭い板でできている。この区間では、この種のベンチが2段の石畳の形



写真21



写真22

をした台座の上に固定されており、間隔をおいて幾つか設置されている（写真ベンチ21）。

背もたれの板に、金属のプレートが付いているベンチがある。そのプレートに文字が書いてある。「In fond memory of Kit Gayford who loved the river」とあり、テムズ川を愛した人の思い出に、遺族が寄贈したものであろう。

側面の鋳物に植物の蔓のようなデザインのあるベンチがある。「写真ベンチ49」の蔓の模様よりももう少し複雑である。ベンチは長めで、真ん中にも鋳物製の肘置きが付いている。石板で歩道よりも1段高くなったところに取り付けられている。この種のベンチは同じものが幾つか設置されている。

ベンチの脚と背もたれのところがコンクリートでできているベンチがある。そのコンクリートの内側の腰掛けと肘置きのところには、短い板が敷き詰めてある（写真ベンチ22）。近くに、この板が数枚剥がれたベンチもあった。

肘置きはないが、腰掛け用に3枚、背もたれ用に2枚の板がリベットで動かないように留められているベンチがある。板のペンキは剥がれているから年数が経っているのであろう。脚は金属製であり、地面のコンクリート板に固定されている。背もたれには文字がある。「In memory of Queenie and Ron Down」とあり、やはり亡くなった人の思い出に設置されたベンチであることが分かる。

肘置きはないが、腰掛けに板が3枚、背もたれに板が3枚付いている長めのベンチもある。脚は金属製で、四角い鉄の棒が4本付いている。

すべて木製の長いベンチで、背もたれも肘置きもある。脚は金具で石板に固定されている。新しいベンチで、文字の書いてあるプレートが背もたれに付い

Thames Pathに設置されているベンチ



写真23



写真24



写真25



写真26

ている。「In loving memory / Barbara Biggerstaff / 1940-2006」とあり、年数
が書いてあるので、亡くなった年が分かる（写真ベンチ23）。

鉄製の細く四角い棒の脚に、3枚の板が腰掛け用に、2枚の板が背もたれ用に
付いているベンチがある。脚は薄い青色で、地面の石板にボルトで留められて
いる。背もたれには次の文字が彫られている。「“In Memory of Maximilian
Holden Young 2002-2004 / Wherever we are, you will always be with us—like
here in your beloved park / In Everlasting Love Mama & Papa, Family &
Friends.”」とあり、このベンチは遺族だけではなく、遺族の友人たちによっ
ても設置されたことが分かる。

Thames Path沿いの建物の塀が煉瓦でできているところがある。その煉瓦塀は
斜めになっており、そこにベンチが設置されている。鉄製の脚に、腰掛け用と
背もたれ用に全部で13枚の幅の狭い板が付いている。Thames Path沿いの煉瓦
塀をうまく利用しているベンチである（写真ベンチ24）。

普通のベンチより2倍の長さがあり、全体にスリムなベンチという感じを受け



写真27



写真28

るベンチがある。細い鉄製の脚に、幅の狭い板が腰掛け用に3枚、背もたれ用に2枚付いている。下のコンクリートに金具で留まっている。全体に細く華奢な感じを与えるため、すぐに壊れてしまいそうである（写真ベンチ25）。

鋳物製の脚に、木製の板が腰掛け用に2枚、背もたれ用に1枚付いている。板状のコンクリートで少し高くなったところに設置されている。このベンチは「写真ベンチ10」のベンチに似ているが、脚のデザインが違う（写真ベンチ26）。

ベンチの外側がすべてコンクリートでできているベンチで、「写真ベンチ22」と同じ形であるので、そのバリエーションと言える。内側に鉄製のものがはめ込んである。腰掛け、背もたれ、肘置きすべてのすべてが金属製なので、長く座っていると体の熱が奪われそうなベンチである（写真ベンチ27）。

5) Hammersmith～Richmond

テムズ川の上流へ向かって右岸のThames Pathを歩いていくと、山形になっているコンクリート製の脚でできたベンチがある。コンクリート製と言っても、さまざまな細かい石を固めて作ったような脚である。その固めた石の脚の上に角材が置かれ、その上に長めの板が置かれている簡単なベンチである。板は青色のペンキが塗られているが、剥げてきている（写真ベンチ28）。

すべて木製の頑丈な感じのベンチである。腰掛けの板は分厚い。「写真ベンチ29」のベンチに似ているが、脚は4本で、それほど長くはない。色は塗られていない。このようなベンチが、間隔をおいて数脚置かれている。

すべて木製のベンチで、脚には大きな角材が6本使われている。腰掛けの部分

Thames Pathに設置されているベンチ



写真29



写真30



写真31



写真32

も分厚い板が使用されており、頑丈だという感じを受ける。濃い空色のペンキが塗ってある。次の文字が書いてあるプレートが背もたれの板に付いている。「Presented by London Borough of Hounslow / Chiswick Area Committee / To commemorate the 150th running of / the Oxford v Cambridge Boat Race / 28th March 2004」とあり、地元の行政区の地区管理委員会が設置したベンチで、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の150回目のボートレースを記念して設置されたベンチである。Chiswick Bridgeの近くにボートレースのゴールの印である大きな柱が建っており、その辺りに設置されている（写真ベンチ29）。

一休みして軽食でも食べられるように三角形のテーブルがあり、その周りにベンチが3脚付いている。草地にあるが、テーブルとベンチの下は四角くコンクリートが打ってある（写真ベンチ30）。

脚が鉄製で、腰掛けに板が3枚、ベンチの前のところに板が1枚、そして背もたれに1枚の板が、それぞれリベットで固定されている。「写真ベンチ31」に似ているが、背もたれがついている鉄製のものの形が少し違い、「写真ベンチ31」

のベンチのように二股になっていない。

脚が鉄製で、腰掛けに板が3枚、膝のところに1枚、そして背もたれに1枚の板がリベットで固定されている（写真ベンチ31）。後ろの扉は煉瓦作りである。同じベンチがこちら辺に何脚も置いてある。

6) Richmond～Hampton Court

Richmond Bridgeのすぐ上流の桜の木の下に置いてあるベンチは、すべて木製で肘置きも付いている。ベンチは金具で下のコンクリートに固定されている。「写真ベンチ32」のベンチに似ているが、背もたれに板が4枚付いている。同じものが何脚か置いてある。

Richmondからテムズ川を上流に向かって歩き始めると、建物が切れたあたりに公園がある。その公園を過ぎると土の道が続く。暫く行くと木製のベンチがある。このベンチの下はコンクリートで固められ、そこに金具で固定されている。この木製のベンチの背もたれのところには、「To Aubrey, with our love. For pondering」という文字が刻まれている。このあたりに住んでいた人で、思索に耽るためにThames Pathを散策していた人ようである（写真ベンチ32）。

Teddington Lockにある木製のベンチは、背もたれ用に幅の狭い板が縦に何枚も付けられており、肘置きもあるものだ。

Richmond Bridgeから上流に向かい右岸のThames Pathを歩いていくと、木製の少し長めのベンチがある。肘置きも付いているベンチで、下のコンクリートに金具で固定されている。背もたれの板に文字がある。「Thames Path National Trail / ←Twickenham 1/3m Richmond Bridge 1 1/4m→」このベンチは道標代わりもしているベンチである。Thames Pathを管理している団体が設置したものである。

地面に打ち込んだ角材に、板を打ち付け、そこに腰掛け用の板を3枚付けただけのベンチがある。濃い黄緑色のペンキが塗ってある。すべて木製で、腰掛けの板の数は違うが、「写真ベンチ44」に似ているベンチである。

地面に打ち込んだ角材に、板をリベットで打ち付け、腰掛けに3枚の板と背もたれに2枚の板を、やはりリベットで留めてあるベンチである。すべて木製のベンチである（写真ベンチ33）。このようなベンチが、間隔をおいて数脚置いてある。

すべて金属製のベンチで、腰掛けと背もたれの付いているパイプは曲線になっている。「写真ベンチ17」と同じ形のものだが、「写真ベンチ17」のベンチは、腰掛けと背もたれ用に、幅の狭い板を何枚も使っている。金属製と木製では、受ける印象がかなり変わるものである。背もたれのところに文字が書いてあるプレートが付いている。「In fondest memory of / Major Herbert Wiggleworth R.E.M.E. / 5.11.23—12.5.92 / From his wife and daughters」とあり、遺族の妻と娘たちから寄贈されたベンチである（写真ベンチ34）。

側面の脚が細かい石を固めたもので、その側面の脚に穴が空いている。腰掛け用に4枚、背もたれ用に2枚の幅の狭い板が、その穴にはめ込まれている（写真ベンチ35）。

「写真ベンチ35」のベンチが2脚横に付いて長くなっているようなベンチもある。

鉄製の脚に、幅の狭い板が、腰掛けと背もたれ用に、何枚も付いているベンチや、角材を2本、地面に突き刺して、その上に板が1枚渡してあるだけの簡単なベンチも設置されている。

RichmondからKingston Bridgeまでの区間で、さらにベンチを見ていく。すべて木製のベンチで背もたれや肘置きも付いている。地面には煉瓦が敷かれ、金具でベンチが固定されている。「写真ベンチ32」と同じ型のベンチである。背もたれの板に文字が彫られている。「Anna Marie Brittain 1974～2000 / Though heaven and earth seem worlds apart / you're forever dancing in our hearts」と書かれている。

すべて木製のベンチで、腰掛けと背もたれだけで肘置きはない。腰掛け用の



写真33



写真34

板は2枚、背もたれ用には1枚の板が使われている。「写真ベンチ33」の型のベンチを横に長く延ばしたようなベンチである。ベンチの脚は地面に差し込まれている。

大きな木の幹を取り巻くようにしてベンチが数脚置かれている。大きな樹木の茂った葉が日陰を作っている。すべて木製のベンチで、腰掛けと背もたれだけである（写真ベンチ36）。

ベンチの枠組みが鉄製で、肘置きは幅の狭い鉄板である。腰掛けと背もたれは木製の板を使ってリベットで留めてある。ライオンのマークが背もたれの上についているベンチがある。

ベンチの脚は鉄製で、木製の板が腰掛け用に2枚と背もたれ用に1枚付いている。色は黒色に塗ってある。ベンチの下はすべてコンクリートで固めてあるわけではなく、脚のところだけがコンクリートで固められている。やはり故人を偲ぶ文字を書いたプレートが背もたれに付いている。

Kingston Bridgeから上流のHampton Courtに向かつては、Thames Pathは右側を通っている。土の道になったところに、2枚の板を芝生に打ち込んで、その上に1枚の板を渡しただけのベンチがある。「写真ベンチ44」のベンチに似ているが、脚は丸太ではなく板である。



写真35



写真36

4. Hampton CourtからOxfordまでに設置されているベンチ

この区間はロンドンの郊外である。住宅地が広がっている地域で、高いビルよりも、一軒家が多い。観光客はロンドン市内ほど多くはないが、ウインザー城などの観光地には観光客が多い。

ベンチは同じものはほとんどない。似ていると思っても、どこかが違っている。そのため、ベンチの種類としては、さまざまなものが見られるのである。

金属製の脚に木製の腰掛けと背もたれ、というベンチが多く見られる。全体的に言えば、すべて金属製というベンチが減って、すべて木製でできているベンチの数が増えているのである。

午後になって、高齢者が三々五々現れるのを見たのも、この区間であった。日曜日などに家族で昼食を広げているのを見たのも、やはりこの区間であった。

Thames Pathを愛している人々がいるのである。故人を偲ぶ文字がベンチにあったのも、この区間が一番多かった。

ベンチで休む人々に、一部の区域を除いて、観光客はほとんどいなかったのである。

1) Hampton Court～Shepperton

テムズ川の上流へ向かって左側を歩いていくことになる。芝生が一面にある大きな公園のようなところに、脚と肘置きが鉄製のベンチがある。腰掛けと背もたれ用には木製の板が何枚か付けられている。このベンチは黒色で下のコンクリートにボルトで取り付けられている（写真ベンチ37）。

Molesey Lockを過ぎてすぐのところにすべて木製のベンチがある。長めのベンチで、背もたれも肘置きもある。脚は金具で地面のコンクリートに固定されている。背もたれに文字のあるプレートが2枚付いている。「This seat celebrates the founding / of the Royal Cambridge Home / for Soldiers' Widows—1851」「Also Sir Guy Nott-Bower, Founder of / Molesey Residents' Association—1965」と書いてある。「写真ベンチ23」とほとんど同じ作りのベンチだが、背もたれのところが少し違う（写真ベンチ38）。

ベンチの脚は幅の狭い帯状の鉄で、肘置きも鉄製である。10枚の板が腰掛け

と背もたれ用に付いている。すべて黒色に塗ってある。下の地面は四角くコンクリートが打ってある。このベンチは「写真ベンチ37」と同じベンチである。

側面の脚と肘置きは鋳物で、板が腰掛け用に4枚、背もたれ用に3枚付いている。「EBC」という文字が側面に付いている。背もたれには、文字入りのプレートが付いているが、文字は判読できない。このベンチは「写真ベンチ67」のベンチと似ているが、側面の文字と、側面に小さな丸い出っ張りが5つ付いているのが違う。

Thames Pathに隣接する公園の中に、金属製のテーブルに金属製の腰掛けが付いたものがある。三角形のテーブルの周りに、腰掛けが3脚付いている。ピクニックのお昼に座るのによいだろう。このベンチは「写真ベンチ30」のベンチと似ているが、違いは、すべて金属製で背もたれがないところである。

2) Shepperton～Staines

テムズ川とThames Pathの間の芝生にベンチが幾つか置かれている。ベンチが何脚かかたまって設置されているところには、ゴミ箱も設置されているところが多い。ベンチの脚が鉄製で腰掛けや背もたれが木製のベンチや、すべて木製のベンチなどが芝生の上に設置されている。

脚が鉄製で腰掛けや背もたれが木製のベンチが、テムズ川とThames Pathの間の芝生に2脚置かれている。

ベンチの側面の脚と肘置きが鉄製で、木製の板がリベットで留まっている。板は腰掛け用に4枚、背もたれ用に2枚付いている。脚は地面のコンクリートに



写真37



写真38

Thames Pathに設置されているベンチ



写真39

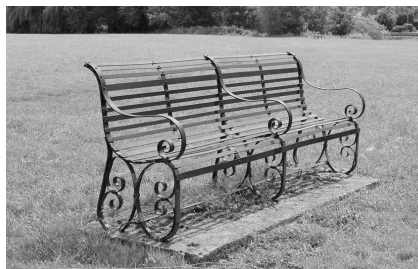


写真40



写真41



写真42

ボルトで固定されている。すべて黒色に塗られている（写真ベンチ39）。

鉄製の脚と、肘置き用には木製の板が付いている。「写真ベンチ39」と同じ形のものだが、鉄の部分は黒色、板は青緑色に塗られている。腰掛けに4枚、背もたれに2枚。脚は地面のコンクリートに固定されている。

すべて金属で、幅の狭い帯状の鉄を使い、うまく形を作ってベンチにしている。腰掛けと背もたれ以外の幅の狭い帯状の鉄板は、すべてにわたって曲線が多く、脚のところも丸くなっているので、座るとベンチ自体がたわむのではないか、または弾力があるのではないかという感じがする。黒色に塗られ、下のコンクリートにボルトで留まっている（写真ベンチ40）。

金属の四角い棒の脚に、板がリベットで留まっている。腰掛け用に2枚、背もたれ用に1枚の板が付いており、板は茶色のペンキが塗られている。坂になった左右の芝生が、ベンチを置くために、そこだけ削られ平らになっている。土砂止めに煉瓦とコンクリートが使われている。文字の書いたプレートがある。「In memory of / Ron Hawkes / who lived nearby / and loved this spot」と書かれて

おり、この場所を愛した人が亡くなったのを偲んで設置されたベンチである（写真ベンチ41）。

すべて木製のベンチで、肘置きは板を縦に付けてあるのが珍しい。肘を置くところが斜めになっている。腰掛け用に板が3枚、背もたれ用に板が2枚付いている。脚は2本しかなく、その2本の脚に、腰掛けを載せる角材と、背もたれ用の板がリベットで留められている。文字の書いたプレートには「Clarice (CLI) and John / Welcome you」とある（写真ベンチ42）。

3) Staines～Windsor & Eton Riverside Station

すべて青色に塗られたベンチがある。脚と肘置きは鋳物製で、腰掛けと背もたれは木製の板であり、背もたれの一番上に丸い棒が付いている。

ベンチの側面の脚と肘置きは鋳物製で青緑色をしている。腰掛けと背もたれは木製で、板にニス塗ってあるようだ。脚には「2002」という数字が見える。文字の書いたプレートが背もたれに付いている。「In loving memory of / Jean &



写真43



写真44



写真45

Charles Davis / who lived on this stretch of river. / 1985—2000」と書かれている（写真ベンチ43）。

テムズ川沿いにある公園で、ベンチがいくつか置かれている。脚と肘置きは鋳物か鉄製で、腰掛けと背もたれは木製のものが多い。木製だけで作られているベンチもある。

丸太が脚に使われ地面に埋め込まれている。その上に、腰掛け用の板が1枚載せてあるだけのベンチである。テムズ川の畔にある（写真ベンチ44）。このような簡単な作りのベンチは他にもあった。

すべて木製のベンチ。ベンチの側面は一枚の大きな板で、脚と肘置きになっている。そこに腰掛け用に2枚の板と、背もたれ用に幅の広い板が1枚、それぞれ両側の大きな板にはめ込まれて、木製の留め具で留まっている。下のコンクリートには金具で固定されているが、側面の木の内側に金属が付いているため、外側から見たら、金具をまったく使っていないと思える。これと同じベンチは、この近くに何脚か設置されている（写真ベンチ45）。

4) Windsor & Eton Riverside Station～Maidenhead～Marlow

Windsor Bridgeのそばにあるベンチは、側面の脚と肘置きが鋳物で、腰掛けと背もたれ用には幅の狭い板が何枚か付いている。ボルトで地面の煉瓦に固定されている。

Boveney Lockにあるベンチはすべて木製である。肘置きもあり、背もたれもある。「写真ベンチ38」のベンチと同じものである。

日本の松に似ていると思って撮った縦長の写真にベンチが写っていた。テムズ川のすぐそばにある小さな公園だ。芝生の中に四角くコンクリートが打たれており、そこにベンチが固定されている。脚と肘置きは鋳物で、腰掛け用の板は5枚、背もたれ用は4枚の板が使われ、金属の細長い板で留められている（写真ベンチ46）。ベンチだけを大きく写した写真よりも、この写真を掲載しておく。



写真46



写真47

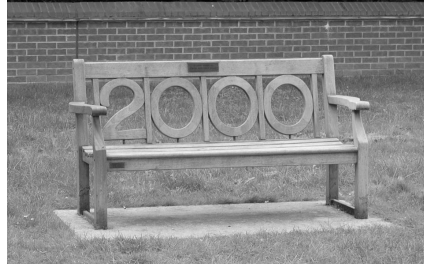


写真48



写真49



写真50

すべて金属のベンチで、丸い金属のパイプに、帯状の金属板が腰掛け用に付いている。単に座るだけのベンチで、背もたれや肘置きはない。青緑色に塗られている（写真ベンチ47）。

このベンチの背もたれには「2000」と木で形作られている。背もたれが数字の形のは初めてである。すべて木製のベンチで、肘置きもある。文字が書いてあるプレートがある。「In loving memory of / Gwen and Bert Dodd」と記載されているから、やはり故人を記念して設置されているベンチだ（写真ベンチ48）。

脚と肘置きは鋳物製で、植物の蔓のデザインである。16枚前後の幅の狭い板が腰掛けと背もたれ用にリベットで留められている。「Queens Jubilee 1952—2002 / Marsh Meadow Committee」という英語が、背もたれの木に彫られている（写真ベンチ49）。このベンチは、この区域の管理委員会が設置したものであろう。

とてもシンプルなベンチである。すべて木製で腰掛けと背もたれは大きな板が1枚ずつである。脚には分厚い角材が2本使われており、腰掛けを載せる板が

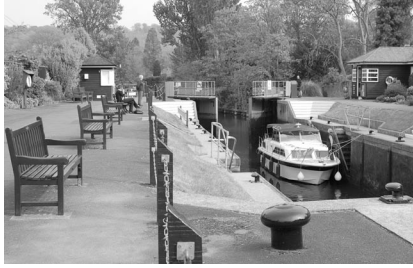


写真51

組み込まれている。「写真ベンチ50」とほとんど同じ構造だが、腰掛けを載せる板が、脚の角材の内側に組み込まれている。

すべて木製のベンチで、腰掛け用に大きな板が1枚、背もたれ用に大きな板が1枚、それぞれ使われている。脚には分厚い角材が使われており、その角材の外側に腰掛け用の板を載せる板が組み込まれている（写真ベンチ50）。

テムズ川のすぐそば、牧草地の端に、牛などが利用するテムズ川の水飲み場があり、その横に1脚ぽつんと木製のベンチが置かれている。水飲み場と言っても、岸が平らになって水のそばまで下りていけるというだけのものである。

Marlow Lockに設置されているベンチである。すべて木製で肘置きと背もたれがあるベンチが5脚見える。人が座っているベンチは、側面の脚が鋳物製で穴があいている。腰掛けと背もたれの板をはめ込む方式のベンチであり、それが1脚設置されている。Thames Path沿いのLockでは、休息できるようにベンチを置いて、歩く人たちの便宜を図っているところが多い（写真ベンチ51）。

5) Marlow～Henley-On-Thames

脚と肘置きが鋳物製で、ベンチの両側に脚と肘置き、そして真ん中に脚が付けられている。少し長めのベンチなので、4、5人が休むことができる。腰掛けと背もたれは木の板で、濃いめの茶色のペンキが塗られている。地面には煉瓦の形をしたものが敷き詰められており、Thames Pathを整備する時に造られたようである（写真ベンチ52）。

座るところだけではなく、丸テーブルが真ん中にある形のものだ。丸いテー



写真52



写真53



写真54



写真55

ブルの脚に、腰を掛ける板が4枚付いている。テーブルだけが濃いめの茶色に塗られている。すべて木製である。テーブルの上にパイプが3本付いている。近くにいる人に聞いてみたのだが、何のために付いているか、だれも用途が分からなかった（写真ベンチ53）。

Henley-On-Thamesの町に近いところにあるベンチは、テムズ川を航行する船が係留できるところに設置されている。板に塗られたペンキがもう薄くなっている。コンクリートで固められた地面にボルトで固定されており、ベンチの脚と肘置きは鋳物で作られている（写真ベンチ54）。

テムズ川のそばに、川に向いてベンチが置いてある。脚と肘置きは鋳物製、腰掛けと背もたれは幅の狭い板で何枚も使われている。「写真ベンチ54」と同じ型のベンチで、写真はベンチの後ろ側を写してある（写真ベンチ55）。

コンクリートの脚に、木製の板が腰掛け用に4枚、背もたれ用に5枚付いているベンチがある。このベンチは「写真ベンチ65」の奥にある2脚のベンチと同じ構造である。

Hambleden Lockの中に置いてあるベンチである。これも「写真ベンチ65」の奥にある2脚のベンチと同じ構造である。文字の書いたプレートが背もたれにある。やはり故人を偲んで設置されたものである。

長いベンチである。側面の脚と肘置きは鋳物製で、幅の狭い板が鋳物にはめ込まれている。背もたれの板に文字が彫られている。「写真ベンチ54」と同じ構造だが、腰掛けと背もたれ用の板の長さが、こちらのベンチのほうが長い。文字を入れるために板を長くする必要があったように思う。「In loving memory of Alan Holt who so enjoyed walking this river bank / By permission of Tom Copas Family, / Owners and custodians of the river bank from Ferry Lane to Old Blades」という文面から、このベンチは、この土地を所有し管理している人の許可を得て、設置されていることが分かる。

6) Henley-On-Thames～Reading

Henley-On-Thames 駅から少し行ったところにあるThames Path沿いの公園にある木製のベンチ。いくつか同じようなベンチが一定の間隔をおいて並んでいるが、背もたれに書いてある文字はそれぞれ違う。1脚のベンチには「A happy remembering of Kitty Holton」と彫ってある。「写真ベンチ38」のベンチに似てはいるが違うところがある。「写真ベンチ38」のベンチの背もたれの板は13枚付いているが、この写真のものは12枚であり、肘置きの形も少し違っている（写真ベンチ56）。

Shiplake Stationの近くの住宅街のはずれにあった腰の掛けられるもの。舗装



写真56



写真57

された道路沿いにいくつも置いてある、木の幹を輪切りにしたものである。写真にはそれらの丸太の他に、四角いコンクリートのかたまりも1つ見られる。自動車が道路脇に駐車しないように置いてあるのかもしれないが、疲れた時に、腰を掛けて少し休むのに助かる腰掛けである（写真ベンチ57）。

Shiplake LockからReading寄りにある木製の簡素なベンチ。単に一枚の厚い板を、脚になる板に釘で打ち付けてある。背もたれも肘置きもないものだ。あたりの木を切った丸太の端がベンチに寄りかかっている（写真ベンチ58）。

あるベンチの背もたれにあった文字は「In loving memory of / William & Annie Staines / who loved the Thames」と書いてあった。

上のベンチのすぐ近くにもう1脚、背もたれに文字のあるベンチが設置されている。背もたれの板の上に「Sonning Parish Council」と彫られており、さらに文字入りのプレートがその横に付いている。プレートの文字は年月が経っているため、少し読みづらいが、「In loving memory of / Roy Cooper / January 1993」とある。



写真58



写真59



写真60

Thames Pathの近くのOracleという会社が寄贈したベンチである。すべて鋳物製のベンチが数脚、間隔をあけて置いてある。ベンチの背もたれには詩人の詩が数行書かれたプレートが付いている。このベンチには、イギリスのロマン派詩人であるWordsworthの詩の一部が書かれている。その詩を載せておく（写真ベンチ59、60）。

An Evening Walk

The swan uplifts his chest, and backward flings
His neck, a varying arch, between his towering wings
The eye that marks the gliding creature sees
How graceful, pride can be, and how majestic, ease....

William Wordsworth

1770—1850

The Swan sanctuary

Oracle

Oracleという近くの会社が寄贈したベンチは数脚あって、ベンチは同じものである。他のベンチの背もたれに付いているプレートには、上のベンチと同じWordsworthの詩ではあるが、違う詩が書かれている。そのベンチに書かれている詩を載せておく。

Remembrance of Collins

Glide gently, thus for ever glide,
Thames! That other bards may see
As lovely visions by thy side,
As now, fair stream! For ever so,
Thy quiet soul on all bestowing,
Till all our minds for ever flow
As thy deep waters now are flowing.....

William Wordsworth

1770—1850

別の詩人の詩がプレートに書かれているベンチもある。

The Wind In The Willows

“The River,” corrected the Rat.

“And you really live by the river? What a jolly life!”

“By it and with it and on it and in it” said the Rat.

“It’s brother and sister to me, and aunts, and company,
and food and drink, and (naturally) washing.

It’s my world, and I don’t want any other.....

Kenneth Grahame

1859—1932

プレートに書かれている詩は3種類であった。

Reading Bridgeがもうすぐのところにある鉄製のベンチには、「Kings Meadow」と背もたれにある。鮮やかな青色のベンチで、同じベンチが数脚置いてある。「写真ベンチ61」と同じものだが、背もたれに書いてある文字が違う。

7) Reading～Pangbourne～Goring Lock

鋳物製のベンチで、真っ青に塗られている。背もたれの丸いところに書いてある文字は「Thames / Promenade」とあり、「テムズ川 散歩道」という意味である（写真ベンチ61）。

木製の横長のベンチが2脚置いてある。1脚のベンチの背もたれに付いているプレートの英語は「In Loving Memory Of / Maureen Morgan / 1936-1988」である。

Whitchurch Bridgeの手前の草地にベンチがある。脚はコンクリート製でそこに板が、腰掛けのところには4枚、背もたれには3枚付いている。人がベンチに座り足を置くベンチの前のところには、石板が3枚敷かれており、土地が濡れている時でも靴が汚れないようになっている（写真ベンチ62）。

Goring Lockに近いところにある木製のベンチで、腰掛け用には3本の角材が使っているが、その内の2本はまだ新しい角材である。脚の角材は古いものだから、腰掛けは修理したのであろう。ペンキも一部塗り替えてある（写真ベンチ63）。

Thames Pathに設置されているベンチ



写真61



写真62



写真63



写真64

すべて木製のベンチで、四角い角材が腰掛けに3本、背もたれには幅の広い板が1枚付いている。肘置きもある。「写真ベンチ63」のベンチとほとんど同じ作りだが、このベンチのほうが、横の長さが短い。文字の書いてあるプレートがあり「Donated by Goring Community Centre」とあるから、このベンチは故人を偲ぶために置かれたものではなく、町のコミュニティー・センターが寄贈したものである（写真ベンチ64）。

8) Goring Lock～Cholsey～Little Wittenham Bridge

美しいGoring Lockの中のベンチ。脚は石製でそこに木製の幅の狭い板が、腰掛けのところには4枚、背もたれには3枚か5枚、ボルトで付いている。ベンチが3脚並んで置いてあるが、一番手前のベンチの背もたれの板は、他の2脚のベンチのものと是不一样的。Lockに来た人たちがゆっくり休めるようになっている（写真ベンチ65）。

Cleeve Lockの中の芝生の上に、丸いテーブルを真ん中にして、腰を掛ける2枚



写真65



写真66



写真67



写真68

の板が、テーブルの4つの脚にそれぞれ付いている。何人か一緒になって、軽い食事でもできそうである。4つの脚は下のコンクリートで固定されている（写真ベンチ66）。

道ばたの草地の中にあるベンチである。四角い鉄の棒に、木製の厚い板が腰掛け用に1枚、背もたれ用にはそれより薄い板が1枚付いている。左右それぞれ1枚ずつ肘置き用の板があったはずだが、片方の肘置き用の板が無くなっていた。Thames Pathは整備されているとはいえ、このように修理がなされていないところもある。

側面の鋳物製の脚と肘置きに、木製の板が腰掛け用に4枚、背もたれ用に3枚付いている。側面の鋳物には「2006」の数字があるから、まだ新しいベンチである。背もたれの木には文字が彫られている。「Good friends we had, good friends we lost along the way / Antony Buckley 1984—2006 / In memory of the big man」亡くなった男性を偲んでベンチを寄贈したものだ（写真ベンチ67）。

腰掛け用に木製の板が2枚あるだけの簡単なベンチである（写真ベンチ68）。



写真69



写真70

ベンチの後ろにある鉄索の向こうは、牧草地が広がっている。

Benson Lockの手前約20分のところにあるベンチで、鉄製の脚に幅の狭い板が15枚付いている。板がたわんでいるから、もうかなり前のものだろう。地面の四角いコンクリートに固定されている。(写真ベンチ69)。

さまざまな種類のベンチが5脚置いてある。こんなに狭い間隔で5脚も置いてあるところを見ると、利用する人が多いのであろう。すべて木製のベンチが3脚、四角い鉄の棒の脚に板が付けてあるベンチが1脚、そして脚は鋳物製で腰掛けと背もたれは板のベンチが1脚である。新しいものと古いものが一緒に置いてある(写真ベンチ70)。

9) Little Wittenham Bridge～Radley～Oxford Station

Culham Lockにしっかりした作りの木製のベンチがある。腰掛け、背もたれ、そして肘置きもきれいで、木製の脚は地面のコンクリートに金具で固定されている。「写真ベンチ38」と同じ作りのものである。背もたれの木にはプレートが付いており「In memory of / VI Colliety / who loved this view」とある。年号は書かれていないが、そんなに古いものではない。

テムズ川沿いにあるボートスクールの前に「写真ベンチ71」と同じ木製のベンチが置かれている。しかし、このベンチは、Thames Pathを歩いている人よりも、ボートスクールの人たちが利用しているようである。

テムズ川のそばに置いてある木製のベンチで、背もたれと肘置きもある。地面のコンクリートに金具で留まっている。背もたれのところに「R.E. Eason



写真71



写真72

R.C. B.C. 1924-1962」と彫ってある。このベンチは「写真ベンチ32」と同じ木製だが、「写真ベンチ32」のベンチは背もたれの板が3枚で横である。このベンチは板が縦に16枚使ってある。腰掛けの板は5枚に対して、このベンチは4枚である。肘置きの方も少し違っている。全体的に見ると同じ木製のベンチだが、まったく同じものは、あまり置いてはいない（写真ベンチ71）。

Iffley Lockの中にある木製のベンチ。丸いテーブルの周りにベンチが4脚付いている。ここには幾つか同じものが置いてある。

Iffley Lockから10分位歩いたところにあるベンチである。鋳物製の脚に、腰掛け用の板が2枚付いており、背もたれ用はそれよりも幅の狭い板が2枚、鋳物の脚の延長上に付いている。簡単な作りである（写真ベンチ72）。

鋳物の脚に、腰掛け用の板が1枚あり、背もたれは2枚の幅の狭い板である。「写真ベンチ72」のベンチとの違いは、背もたれ用の板が、鋳物の脚の延長上の、鋳物に空いた穴に通されて固定されていることと、脚の形である（写真ベンチ73）。

Oxfordの町はずれに、脚と、腰を掛けるところがある簡単な作りの、すべて木製のベンチがある。「写真ベンチ58」に似ているが、腰掛け用の板が2枚使われている。古いベンチである。

Oxford駅に近いところにあるベンチで、脚と肘置きが接している箇所に「Oxford City Council」と金色の文字がある。脚と肘置きは鋳物製で青色である。腰掛けと背もたれは木製の板である。Thames Path沿いに同じベンチが数脚置かれていた（写真ベンチ74）。

Thames Pathに設置されているベンチ



写真73



写真74



写真75

脚の部分だけがコンクリート製で、それに木製の板が3枚付いており、腰が掛けられるようになっている。コンクリート製の脚に鉄製の帯状の棒が付いており、それに背もたれの板が付いている。背もたれの板は1枚のみである（写真ベンチ75）。

5. OxfordからThames Headまでに設置されているベンチ

この区間はまだ開発が充分に行われていないところがほとんどである。Thames Pathの道も充分には整備されていない区間が多い。

Thames Pathへ接続する交通機関は利用するのに不便である。鉄道の駅を降りてバスに乗らなければならないところがほとんどであるが、1台バスに乗り遅れると、次のバスを待つのに1時間以上かかることもある。

ベンチは町や村の近くになると置いてあったり、村の中に置いてあったりす

るが、Thames Pathを歩いている人のために設置してある、というところはかなり少ないようだ。

Thames Pathが畑の端を通っているところがある。そんなところにはベンチは設置されていない。畑では大きな機械を使っている。その機械は畑のぎりぎりまで来て、畑を耕したり収穫したりしているので、機械が方向転換のため回転する時、機械の一部が畑の端から外にはみ出しているのを何回も目撃したことがある。ベンチを設置することは畑仕事の効率を下げるのである。

自動車の通る道路の端にちょっとした草地があり、そこを歩かなければならないThames Pathもある。田舎の道路で見晴らしがよいところは自動車がものすごいスピードを出して走り去っていく。そのようなところでは、たとえベンチがあったとしても、ゆっくり休むこともできないだろう。

Thames Headに行くには、牛がいる広い牧草地の中を水源まで歩いていかなければならない。水源と言っても、水が湧き出ているわけではない。牧草地の端に、テムズ川の源を示す石碑が建っているだけである。「雨が降った後は水が流れる」と現地の人が言っていたが、確かにそんな程度である。そんな牧草地の中にベンチはない。牛を放牧するのにベンチは邪魔になってしまうのである。

ベンチの種類は、すべて木製のものが多い。自然の中に置かれているベンチは、自然と共存できる木製のものが多いのも頷けるのである。

ベンチの数が極端に少ないということは、人の数が少ないということだけではなく、整備されていないThames Pathを歩くのに休み休み歩かなければならないような、体力に自信のない人は来ない、ということなのではないだろうか。

1) Oxford Station～Eynsham

ベンチの脚も、背もたれや腰掛けもすべて木製である。背もたれと腰掛けには分厚い板がボルトで固定されている。地面は四角くコンクリートが打ってあり、脚が金具で固定されている（写真ベンチ76）。

2) Eynsham～Tenfood Bridge (Buckland)

Northmoor Lockの近くにあるベンチ。大きな木の幹をある程度の長さに切り、それらをベンチの2本の脚にして、その上に黒く塗った分厚い板が置いてある。

Thames Pathに設置されているベンチ



写真76



写真77



写真78

Thames Pathのそばの草地に設置されており、写真に見える家の人が作ったベンチのようである（写真ベンチ77）。

木製の脚と腰掛けだけの簡単な作りのベンチがテムズ川のそばに設置されている。脚は丸太で、腰掛けには板が4枚使われている。雑草が茂っており、ベンチの半分は草に隠れている（写真ベンチ78）。

3) Tenfood Bridge (Buckland)～Lechlade～Cricklade

Rushey Lockの芝生の上に、木製のベンチが置いてある。腰掛けと背もたれのあるベンチで、Lockを守っている人の仕事を見ながら、休憩できるようになっている。

大きな木を切った丸太がそのまま置かれているところがある。ベンチの代わりに置かれているわけではないが、田園地帯を歩いていると、このようなものにでも腰を掛けて一休みすることはできる。

4) Cricklade～Ewen

Ashton Keynesの村の中の分かれ道の横の芝生に、木製のベンチが1脚置かれている。脚は地面のコンクリートに固定されており、肘置きも背もたれもある。村の近くや村の中には、ベンチを置いてあるところがある。利用する人がいるのであろう。この写真は建物を中心に写しているのので、ベンチは左下に小さく写っている（写真ベンチ79）。

帯状の鉄の板で脚と肘置きができているベンチが置いてある。腰掛けと背もたれ用に木製の板が10枚付いている。すべて濃い青色に塗られている。「写真ベンチ37」と同じベンチである。このベンチはThames Pathのそばの家の前の芝生に置いてあった。

Thames Pathの横に草地の広場がある。その草地の中に、木製の丸いテーブルと、その周りに木製のベンチが付いているものがある。ベンチの腰掛け用には板が2枚リベットで留めてある。その腰掛けがテーブルの周りの4カ所に付いている。「写真ベンチ66」と同じ形のベンチである。

5) Ewen～Thames Head

車道から離れて、揺籃のテムズ川沿いを歩いていくと、このベンチが設置されている。すべて木製のベンチで、地面に打ったコンクリートに、動かないように金具で固定されている。背もたれも肘置きも無く、本当に腰を掛けるだけのベンチである。腰を掛けるには3枚の板があり、その1枚に英語が書かれているプレートがある。「Kemble & Ewen / Queens Golden / Jubilee Year /



写真79



写真80

2002』と書かれていた（写真ベンチ80）。このベンチが最後のものである。この最後のベンチは日本の縁台に似ていた。

6. むすび

Thames Pathに設置されているベンチは、素材的には木製のもの、金属や鋳物製のもの、コンクリート製のものなどがあり、ほとんどのベンチはそれらの素材が組み合わされ、一緒に使われているベンチである。

デザインのみにみると、単純なものや複雑なものがある。ロンドン市内から離れるにつれて、デザインの斬新なベンチや、側面の鋳物の模様が複雑なベンチは少なくなり、ベンチとしては単純な構造のものが多くなってくる。

そして、テムズ川の源に近くなるにつれ、すべて木製のベンチが徐々に増えてくるのである。

ベンチというより、単に1人が腰を掛けるだけのものも置いてある。いろいろなベンチがThames Pathには設置されているのである。

都市のThames Pathには、同じベンチが何脚も置かれているところは何ヶ所かあった。これは、多くの人たちがベンチを利用するために、数を多く設置しなければならず、一つ一つに別の種類のベンチを設置することは無理なのであろう。

郊外のThames Pathには、一部の観光地を除いて、都市部のように同じベンチが何脚も設置されているところはほとんどなかった。ベンチの種類はさまざまであるが、すべて木製でできたベンチが多くなってくる。そしてThames Pathを利用し愛した人たちが多くいた。その人たちが亡くなった後、思い出に、遺族がベンチを寄贈している事実から、このことが分かるのである。

田園のThames Pathのそばには、人が住んでいないところが多い。村の近くや村の中にベンチはあるが、ベンチがほとんど設置されていないところが多いのである。これはThames Path自体の整備がまだできていないということもあるが、都市や郊外に比べると、利用する人が極端に少ないということが大きな理由であろう。だから、ベンチの数が極端に少ないのである。今後近隣に、人が今よ

りも多く住み、Thames Pathを利用する人たちが増え、Thames Pathを愛する人たちが増えていけば、田園のThames Pathも、徐々に郊外のThames Pathになっていくのではないと思われる。

このようにThames Pathに設置されているベンチを見てくると、Thames Path自体が、大きく3つに分割されることが分かった。都市、郊外、そして田園である。

Thames Pathと一口に言っても、全行程が同じ状態、同じ状況ではなかったのである。

Thames Pathに設置されているベンチを分析すると、この3つの区間の中では、郊外のThames Pathは設置されているベンチの種類が多く、まったく同じベンチが何脚も同じ場所にほとんど置かれていない区間である。また、Thames Pathを利用している多くの人たちが、Thames Pathを愛している近隣の人たちであることも分かるのである。

現在の郊外型Thames Pathは、田園型Thames Pathの未来の姿であり、都市型Thames Pathの過去の姿であると言えるであろう。

以上

(この小論は、法政大学の2007年度在外研究により出来たものである)

注

- 1) ベンチの写真をすべて掲載できないのは残念であるが、紙面が許す限りの写真を掲載してもらった。ただし、同じようなもので部分的に違うものは、一部掲載はしたが、ほとんどの写真は掲載していない。さらに、色だけが違うもの、あまりにも汚れていたり、ベンチの一部しか写っていないものは割愛した。それでも写真は80枚になった。Thames Pathに設置されているベンチは、種類のにはまだあるだろうが、だいたいの感じはお分かりいただけるものと思っている。
- 2) 石川郁二「Thames Pathの3分割」(『法政大学多摩論集』第25巻、2009年3月)。

参考文献

Big London A-Z, New Edition 2007, Exeter, UK: Geographers' A-Z Map Company Ltd., 2007.

Emmons, Ron, *Walks along the Thames Path*, London: New Holland Publishers (UK) Ltd., 2001.

Hatts, Leigh, *THE THAMES PATH*, Milnthorpe, Cumbria: Cicerone Press, 1998.

Thames, the river and the path, 4th Edition, Reading: GEO Projects, 2006.